健康づくり・スポーツ推進特別委員会行政視察概要

１　視察月日　　令和４年10月17日（月）～10月18日（火）

２　視察先及び視察事項

（１）京都府

京都府立京都スタジアムにおける健康づくりの取組について

（２）京都府京都市

京都市体育館における健康づくり・スポーツ推進の取組について

３　視察委員

副委員長　大　野　トモイ

委　　員　田　中　ゆ　き

同　　花　上　喜代志

視察概要

１　視察先

京都府

２　視察月日

10月17日（月）

３　対応者（役職名）

文化スポーツ部文化スポーツ施設課長　　（挨拶）

文化スポーツ部文化スポーツ施設課副主査　（説明）

文化スポーツ部文化スポーツ施設課主任　　（説明）

４　視察内容

（１）京都府立京都スタジアムにおける健康づくりの取組について

ア　スタジアムの概要

平成30年１月20月に起工、令和２年１月11日に竣工した本スタジアムは、ＪＲ亀岡駅から徒歩３分の場所に立地している。京都府内唯一のアメリカンフットボール、ラグビー、サッカーなどの球技専用球場で、メインスタンド3910席、バックスタンド6780席、北サイドスタンド5530席、南サイドスタンド5450席と、２万1670人の収容人数を誇る。フィールドの広さは、サッカーやラグビーの国際試合の開催が可能な、南北１２６メートル、東西84メートルである。

正式名称は京都府立京都スタジアムであるが、ネーミングライツを導入しており、通称サンガスタジアムｂｙＫＹＯＣＥＲＡとして親しまれている。日本プロサッカーリーグに加盟するプロサッカークラブ、京都サンガＦ.Ｃ.のホームスタジアムである。

イ　スタジアムの附帯施設

本スタジアムには附帯施設として、スポーツクライミング、３ｘ３バスケットボールコート、ＶＲフィットネスゾーン、ｅスポーツゾーン、ドローンサッカーコート、コワーキングゾーン、貸会議室、フードコート、足湯施設、企業主導型保育園などがある。また、ピッチは、スタジアムウェディングやスタジアムフォトのための貸し出しも行っている。

ウ　健康づくりの取組

フィットネスゾーンでは、健康教室として、姿勢改善や身体調整

ストレッチ、優しいヨガなどのクラスがあるほか、ヨガやピラティス、エアロビクスやステップなども行われており、パーソナルトレーニングを受けることもできる。

また、ＶＲゾーンでは、眼前の巨大スクリーンに映し出されたデジタル映像に合わせてバイクをこいだり、ＶＲ映像を投影しながらヨガを行っている。

学生に人気が高い３ｘ３バスケットボールコートに加え、国際基準を満たしたスポーツクライミング施設には、キッズ用のエリアも併設されている。

エ　質疑概要

Ｑ　災害時に活用できるスタジアムの機能は何か。

Ａ　スタジアムの屋根は太陽電池を搭載するなど、環境配慮型のスタジアムであるだけではなく、蓄電システムを設置していて、電源供給が可能であるほか、避難所や備蓄倉庫としての機能も併せ持っている。

Ｑ　企業主導型保育園の利用状況はどうか。

Ａ　最寄り駅から徒歩３分という立地もさることながら、天然芝のピッチや室内練習場を園庭として利用し、日常的に遊ぶことができたり、運動会をピッチで行うことができるなど、スタジアム全体を生かした特色ある保育を行っており、令和３年６月の開園当初から人気が高い。

Ｑ　ｅスポーツゾーンやＶＲフィットネスゾーン、ドローンサッカーゾーンや貸会議室など、いわゆるスポーツを観戦するスタジアムとしての機能以外の附帯施設を多く整備している狙いは何か。

Ａ　フィットネスゾーンが整備されていることは、指定管理者である特定目的会社の一つがスポーツ施設運営会社であることも大きい。ｅスポーツやＶＲフィットネス、ドローンサッカーには、年齢・国籍・性別・障害の有無などに関係なく、誰もが参加できるユニバーサルスポーツという側面もあることから、地域の誰もがスタジアムに集えるようにとの狙いがある。ｅスポーツゾーンの活用とスタジアムでの試合観戦をセットにした婚活イベントなども開催している。

（２）委員所見

本年度、本委員会では、健康長寿社会の実現に向けた高齢者・青少年の日常的な健康づくりについてを調査・研究テーマとして委員会活

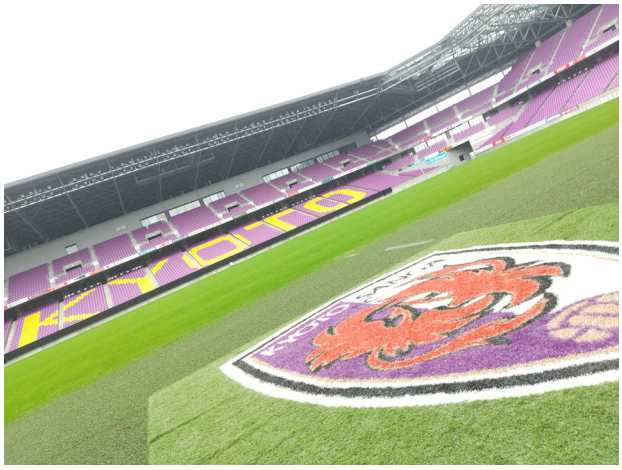
動を行ってきたところである。

６月の委員会では、スポーツがいかに健康寿命に寄与するか、青少年の健康育成に寄与するかという点を重視して調査すべき、との意見や、生涯スポーツを行う人が増えている一方で、スポーツを行う場、特にマイナーなスポーツを行う場が少ないという声を聞くことが多いため、注視すべき、といった意見が出ていた。

また、９月の委員会では、参考人を招致し、ｅスポーツがもたらす高齢者の健康づくりの可能性について、意見を聴取し、質疑を行ったところである。

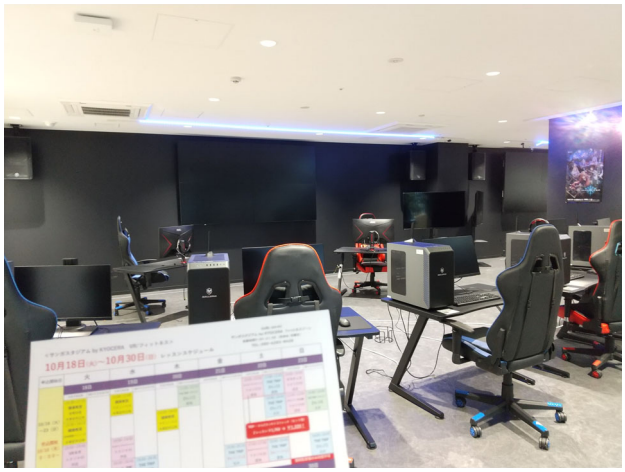
こういった経緯を踏まえて、今回の視察先である京都府立京都スタジアム（通称：サンガスタジアムｂｙＫＹＯＣＥＲＡ）を捉えるとき、幼い子供から高齢者まで、幅広い世代を対象とした多種多様な健康づくりの取組を聴取できたことは、非常に有益であった。

高齢化社会が一層進展するなか、スポーツ観戦や健康づくりにとどまらず、地域住民が集う場や生涯学習の拠点としての本スタジアムの在り方に、大きな可能性を感じた。



（ピッチの様子）

（キッズスペースとドローンサッカーコート）



（e スポーツゾーン）

視察概要

１　視察先

京都府京都市

２　視察月日

10月18日（火）

３　対応者

文化市民局市民スポーツ振興室担当係長　　（挨拶）

文化市民局市民スポーツ振興室施設担当　　（挨拶）

公益財団法人京都市スポーツ協会事業運営課長　（説明）

４　視察内容

（１）京都市体育館における健康づくり・スポーツ推進の取組について

ア　施設概要

昭和38年５月に開設された京都市内最大級の規模を誇る総合体育館であり、京都市内初の運動公園として整備された京都市西京極総合運動公園内に位置している。

アリーナの規模は2400平方メートル、観客席は約2500席であり、バレーボールやバスケットボール、バドミントン、フットサルなどの大会や練習等に利用されている。使用可能種目は、ハンドボール（１面）、テニス、バスケットボール、フットサル（３面）、バドミントン（12面）、卓球（20台）等となっている。３分の１面などの部分使用も可能である。

設備としては、アリーナ（体育館）のほか、多目的スタジオ、シャワー付ロッカールーム、放送設備、貴賓室、諸室（12名程度）、医務室、ドーピング検査室、駐車場（約２００台）等が設置されている。

同施設のある西京極総合運動公園内には、府内唯一の第一種公認陸上競技であるたけびしスタジアム京都や、府内最大規模のスタンド席を持つ野球場であるわかさスタジアム京都、府内唯一の屋内50メートル国際公認プールを持つ京都アクアアリーナなどが立地し、スポーツの一大拠点の中核をなす市民スポーツ・健康づくりの場となっている。

交通アクセスにも優れており、阪急京都線西京極駅から徒歩10分

である。また、様々な種目の大規模大会が行われ、市民・府民の身近なスポーツの場として、利便性の高い施設である。日本プロバスケットボールリーグ（Ｂリーグ）に加盟する京都ハンナリーズのホーム体育館でもあり、年間約40試合が開催されている。

イ　事業内容

運営管理は、西京極スポーツネットワーク（ミズノ株式会社と近建ビル管理株式会社の共同事業体）が行っている。利用状況としては、令和３年度稼働率は77.7％（平日、土日祝日合算）であり、コロナ禍前（令和元年度73.6％）の水準に回復している。平成23年から令和３年度までは、ハンナリーズアリーナとしてネーミングライツが導入されていたが、現在は市民利用料金が主な収入となっている。

事業の課題として、厳しい財政の中、施設の老朽化への対応やバリアフリー対応、Ｂリーグのエンターテインメントパフォーマンスへの対応などのコスト面が挙げられる。特に夏場の空調設備のトラブル防止のために、冬場にメンテナンスを実施するほか、アリーナ床面の張り替え、照明のＬＥＤ化、照明スイッチの切替え（Ｂリーグ対応）、車椅子用観客席の整備など、利用者ニーズに応じた整備が行われている。

こうした課題に対応するため、より多くの市民利用を促し、健康づくり・スポーツ推進のため、ホームページ、全戸配布される市の広報紙、地域リビング新聞、ＦａｃｅｂｏｏｋやＩｎｓｔａｇｒａｍ等のＳＮＳを駆使して、様々なスポーツや健康づくり講座といった、各種教室の情報発信をしている。また、西京極運動公園を拠点とした市民参加型スポーツイベントを開催するなど、スポーツを観る楽しさ、体験する楽しさを体感できる場の創出も行っている。

また、隣接する市民スポーツ会館には、体育室や１００名以上の講習等にも利用できる会議室、12名程度を収容できる会議室が併設されているほか、京都ゆかりのトップアスリートの功績をたたえ、子供達や市民に夢や希望を与える事業、京都スポーツ殿堂ホールが行われている。元プロ野球選手やオリンピック代表選手などのゆかりの品々の展示を間近に見ることができる貴重な場となっている。

ウ　質疑概要

Ｑ　老朽化への対応はどのような頻度で行っているのか。

Ａ　体育館床面の張り替えなど、対応が必要となった箇所に対して

適時実施している。

Q　バリアフリー化への対応について知りたい。

A　車椅子対応客席を設置するとともに、狭い観客席を利用する場合は、一般利用者の協力を得てスペース等の確保を行っている。

Q　健康づくりに資する市民利用の促進をどのように行っているのか知りたい。

A　市の広報紙、ホームページ、タウン誌等、様々なツールを活用して、広報周知をしている。利用に関しては、来館での予約に加えて、予約システムを導入するなど工夫をしている。

Q　Ｂリーグ開催における課題について。

A　エンターテインメント性へのニーズに応えるには、既存の設備では困難な面もあるが、できる限り満たすことができるよう対応している。

Q　コロナ禍前と比べた利用者数の状況はどのようなものか。

A　これまで多くの市民に慣れ親しまれてきた施設であり、コロナ禍前に近い利用者が戻ってきている。バドミントンやバレーボールなど、市民に身近なスポーツ利用が多い。

（２）委員所見

昭和38年に創設された施設であり、メインアリーナ（体育館）のみならず、附帯施設の老朽化が目立っていたが、長きにわたり市民利用されてきた実績、利便性等もあり、市民にとって身近な健康づくりの場としての役割を十分に果たしている。

老朽化に対して、拙速に建て替えをするのではなく、市民に親しまれてきた既存施設を大切に使う視点も重要と考える。そのためには、老朽化に対して、安全性や快適性の確保をする対応が随時求められてくる。

（バドミントン活動の様子）

（車椅子観客席にて）